1.本は本棚に入れましょう

もしもし。こんばんは。
今年の冬は寒いねえ……。って、去年も言った気がするけどさ。あはは。
今ね、本を読んでるんだ。ノスタルジーを題材にした小説なんだけど。
もうね、出てくる単語がさ、懐かしいったらなくて。
お道具箱、算数ブロック、連絡帳……みたいな。小学生の頃に使ってたよね。
算数ブロックはなんか、使った記憶ないけど……。
でもこういう単語を見るだけで、ぽっと昔の記憶が蘇るの、不思議だよね。
今こうして君とお話してる時間も、いつか懐かしいって思える時が来るのかな。
……ふふ。そうだね。君が初めて声をかけてくれたあの時、懐かしいなぁ。
何だったっけ。「あの、黒崎さん！」……だったかな？
えー？　どうしたのおー？　慌てちゃって、君らしくないなぁ。
確かそのあとは、「黒崎さん、好きです！」だよね。きゃー♪　きゃー♪
あははは。でも、私は……しどろもどろというか、ろくに何も言えなくて。
結局、電話番号だけ教えて……逃げちゃったんだよね。
でも、その、帰ってるときも、家に着いても、ずっとぼーっとしちゃって。
頭の中が君の全てで満ち満ちになってさ、どうしても声が聴きたくなったの。
……嬉しかったなぁ。まさか、まさかね、告白されるなんて……。
夢にも思わない、を実体験しちゃったよ。もう、覚めない夢を見てるようで。
あの日からずっと、ずううううっと君の事考えてるよ……。
最近はね、私は君に出会う為に生まれてきたんだって思うようになったよ。
……、……君も？　えへ。えへへへへ。ありがと。
ふたりでそう思ってるなら、きっと真実だね。
……ああ、そうそう。本の話に戻るんだけど。
唐突ですが、君を叱らないといけない事があるんだよね。……教えてほしい？
仕方ないなぁ。
……君さ……。ベッドの下は本棚じゃないんだよ……？
んー？　何だか今日の君は落ち着かないねぇ。やましい事でもあるのかな？

言わせてもらうよ。……スケベ、変態！
独り暮らしであんなところに本を隠すって事は、つまりそれはさ、
私に見つからないようにしてるんでしょ？　そうだよね？　ねー？
どうしてあんな本持ってるの？　どうしてあんなもの読んでるの？
私は？　私じゃダメなの？　私じゃ足りない？　足りませんか？　ねえ。
今度からライター持っていくね。見つけたらすぐ燃やすからね。いいよね。
……うふふ♪　とまあ、あの時思った事を言ってみました。怖かった？
うん、でもね、君も男の子だもん。仕方ないよ、うん。仕方ない、仕方ない……。
……。……ああいうのが好きなの？　言ってくれれば私、頑張るよ……？
か、身体はもう、どうしようもないけどさ……。
それ以外なら……。
ほら、君の家で色々アレした時、もうしないって言ったけど、でも、
いつまでもそれじゃダメだと思うのですよ、あは。
だってその、いつかは君と……こども……つくるんだし……。
なッちょっ、こ、声がイヤらしいよ君！　私は真面目な話をしてるんだよ！？
もうッ、君は下品な事しか考えられないのかなぁ！　怒るよ、ぷんすか！
これはもう……愛のありがた～い説教が必要だね。
君、今すぐそこで正座しなさいっ。し、な、さ、い！
した？　うん、いいでしょう。
もう、君というひとは……今日という今日は考えを改めさせるからね。
前々からそうだったけど、君はちょっと、スケベすぎます。
いやその、私もね、嫌だとか気持ち悪いだとか、そういうのはないよ。
まあ、君だからだけどさ。君以外だったら御免被るけどさ。
でもでもでもでも、でーも！
君はッ、何でもかんでも私をスケベに関連づけようとするよね！
私だよ？　黒崎愛だよ？　そういう類いのアレとは何より縁遠いからね。
地味でぼっちで……って自分で言うのもなんだけど、とにかく、
こじつけもいいとこだよ。君の想像力のたくましさには感心……
じゃなくて、呆れちゃうなぁ。

……なにさ。無自覚スケベってなにさ！　立場を弁えなさい！
ぐぬぬぬ。爽やかな声で反抗するね、君……。
こうなったら……。
こほん。私、君の事……きらいになっちゃうぞ？
アッいやいやいやうそうそうそだからうそうそ。
すき。だいすき。なりません嫌いには。好き。千パーセント大好き。
……う、うう、また君に負けちゃった……。
からかい上手のマイダーリン……。しゅん……。
ん……えへへ。慰めてくれるのやさしい――じゃなくてっ！
もおおお。もおお、だよもお。牛になっちゃうよ。
……もういいもん。スケベだからこその君……みたいなところあるし。
でもでも、……そういう話はね、誰にも聞かれない時と場所でね……？
私も……そういう、気分の時は……しちゃうから。
はいおしまい！　もう寝ます～。寝ちゃいます～。おやすみ～！

2. 私がいるから大丈夫

はいもしもし、愛だよ～♪　……え？
あれ？　だ、大丈夫……？　どうかしたの？
あ、声がその、ツートーンくらい低い……というか。
……よかったら、聴くよ……？
ん、……うん、……、うん。……なるほど。
……私もだよ？　将来の不安とか、先の事考えちゃうと、
漠然とした恐怖が襲ってきちゃったり。
うん。あのさ、不安とか大丈夫かな、とか……そういうマイナス感情って、
誰でも持ってるモノだと思うんだ。
だって、ひとだから。喜怒哀楽あってこそのひとだもん。
君が感じるように、私も感じるよ。
人生をゼロから数えて、最後……死んでしまう時までを想像すると、
頭の中、ぐちゃぐちゃになっちゃうよね。たぶんそれって、
何十年も生きる間にどれだけ苦悩とか、悲しみとかを味わうんだろうって、
そういう怖さもあると思うんだけど、でもね。
いちばん怖いのは、死ぬっていう事を、
この世界の誰ひとり経験してないから……なんじゃないかな。
誰にも聞けないし、誰にも分からない。
だから、おばけとか神様とか、そういう実態のないものを作って、
死後にもちゃんと世界は続くって、思いたいんだよ。
私はね、君と出会う前は、あんまりそういう思いは持たなかったの。
失うものは、家族だけだったから。他に誰もいなかったから……。
ふふっ。今は、昔より臆病になっちゃったかも。
君が、……君が私の、何よりも大切な、唯一無二の存在で……、
ああああぁー……好き。だからね、私がいるから大丈夫だよ。
苦しみ悲しみ、そんな荒波は、私と一緒に越えていこうよ。
そしたら、苦しんだ分、悲しんだ分、同じくらい幸せとか喜びとか、
やって来るはずだから。人生ってそういうものだよね。
私、どんな困難が来ても、君を支えるからねっ。
どれだけ悩んだっていいし、辛い思いをしたっていい。
誰にでも襲ってくるものだから。ただ、それを何とかしたいときに、
そばにいてくれる誰かが……いるかどうかだよ。
ふふ。君には、私がいるよ？　もちろん私には君がいる。
心から信じて、信頼し合ってるから……こういう事、言えるんだよ。
君がこうして電話をかけてきてくれたのも、私を……信じてるから、でしょ？
ね？　……うん♪　私、しっかり応えるから。ちゃんと聴くから。
どんな小さな悩みでも、相談してくれると嬉しいな。
よし。うふふ。君の元気を引き出す魔法、黒崎ビィイイッム！
あはははは。笑ってくれた。
高校生の頃は、私が君に励まされてばっかりだったけどさ、
今は二人で、どっちも担っちゃってるねぇ。

……ん、楽しいよ♪　いつだって楽しい。
さ、暗い時間はおしまいにしよ？　笑顔は幸せを呼ぶんだから。
にっこり笑顔で、あいらぶゆー♪　ってね。私、お馬鹿さんみたいかな？
……え、なにそれー！　そんな、いつもじゃないよっ。
むううッ、君こそいつも私を馬鹿にしてっ……。
まあ、かしこいとは言わないけどさぁ……！

3.黒崎愛ドル

ぁあ、ぁあぁぁ……、あ……、も、ももももしもし。愛だよ、愛。
い、いいいいま、あのあのあの、げ、芸能……プロダクション？
の、ひとから、名刺、もらって……うぁあ。
アイドルになりませんかって、おかしいおかしいおかしいおかしい。
今日は生きる世界間違えた……絶対間違えてるよ。おかしいもん。
なんで、なんで私？
あのひと、ええと、名刺……姫神さん……だ。
姫神さん、視力がマイナスに振り切れてるんじゃないかな。ほんと。
私のどこを見てアイドル……？
それとも何か聞き間違えたかな？
時期が時期だし、そうだ、焼き芋、
アイドルと、「お芋焼いとる」を聞き間違えた可能性もぉお……
――ハッ。ぁ、ああごめんごめん。一方的に喋りすぎちゃった……。
あ、き、君もおかしいと思うでしょ？　ね？　思って？
現実感なさすぎて、私、灰になって消えちゃいそう。サラサラ～～……。
……へ？　な、なに、やっぱりって何が。え？
ひえっ。か、かかか可愛くないよ！　う、あ、君にそう言ってもらえるのは、
ほんと、すっごく嬉しいし、うん。でも、でもでも、それは君だからで、
君以外にそういうのは相当アレで、アレだから……アレなの。
ひぇえええ。頭の中、真っ白……、……あの、君の声もっと聴かせて。

君の声が私の精神安定剤だから……。
……ん……うん……。……、……ふうう。
ありがとう。少し落ち着いたよ。
ええと、まあその、私がどうこうというのは置いておいて。
アイドルって私、よく分からないんだけど……きらきらしてるひとたちだよね。
歌って踊って、可愛くて、綺麗で……いつでも笑顔で。
女の子の理想だよね。あ、君、詳しいの？　知らなかった。
その、好きなアイドルとか……いるの？　……、……ふーん……誰かな……？
うん？　名前教えて？　調べるから。教えて？　誰？　可愛いの？
ハッ。い、いや、それも一旦後にしよう……ああ、やっぱりむりむりむり。
でも、お返事しないと。名刺に電話番号あるから……ごめんなさいしなきゃ。
あぁ……断るの苦手だよぉ。でもでも、断れるひとにならなきゃ……。
ん……ごめんね、ありがとう。好き……。
へ？　なに……？　……うぁ。あ、う、うん……。
き、君だけのアイドルになら……なりたい、かも。君の為に……なる。
うん……。そう断ろう。
もう私には、最高のプロデューサーさん兼パートナーがいるんです、って。
えへへ。言えるかなぁ……？　恥ずかしくて口ごもりそうだけど。
うん、じゃあ、ちょっと失礼します。終わったらまた電話していい……？
ん♪　また、あとでね♪

……あ、もしもし。あのね、断ったよ。……うん、ちゃんと出来ました。
姫神さん、残念がってたけど……でも、すんなり受け入れてくれたよ。
よかったぁ……。
でも、もし仮に私がその方面に進んでもさ、私、運動神経よくないし、
歌だって、全然歌った事なくて……、……え、カラオケ？
あ、その、行った事ないや……。なんか、怖いし……。
何がってわけじゃないけど、その、雰囲気……？
え、いやぁあっ、むりむりむり。君の目の前でそんな、歌うだなんて、そんな、

恥ずかしさ極まって沸騰しちゃうよ私ッ。
あ、ず、ずっと聴いてる側でいいかな、あはは。
君ってすごい良い声だしっ。心地好い声だしっ。いつまでも聴いていたいもん。
……う、あぅ。……そう、だね。それじゃ楽しくないもんね。
よし、私も……頑張って歌えるようになるから。
うん、君だけのアイドルになるって決めたから。
歌い方とか、教えてほしいな……。えへへ……。
お、音痴でも笑わないでねっ。約束だよ？　……うん、ありがと♪

4.家族愛と

もしもし。うふふ。黒崎愛、君と私の為に電話かけちゃいました。
今、大丈夫？　……ん、よかった。
うう、今日も寒いね。
あー、季節って早いなぁ。夏が来たと思ったらもう冬だなんて。
しかも、もう年末……恐ろしいくらい時間が過ぎ去るね。
……暑さ寒さも彼岸まで……、
うふふ、君と一緒なら七日間もあっという間だろうねぇ。
ね♪　今年一年、どうだった？
私は……君と同じ時間を過ごせた事、
君に支えられて、君を支えて、大好きな大好きな君と並んで歩いて、
もう、神様に叱られちゃうんじゃないかなってくらい、幸せだったよ。
その幸せは今も続いてるし、この先もずっと……。
ああっごめんねっ。しみじみとしちゃって。
何かね、ふと思うときがあるの。
こうしてふつうに電話して、ふつうにお話ししてるけどさ、
それが当たり前だって感じられる事そのものが、
どれだけ幸せでありがたいんだろうって。
テレビを見てて、事故のニュースとか、災害とか……当たり前の日常って、
ある日いきなり壊れるものでしょ？
だからね、毎日毎時毎分毎秒、今ここで君と生きられる私って……。
うん……言ってみれば奇跡かな。
奇跡……君が私を見てくれたのも、声をかけてくれたのも、
……告白……してくれたのも。全部が奇跡。君と、つながれた事も。
ふふふ。ぜーんぶ、大事にしてるからね。
この前言ったけどさ、これから先、色んな事が起きると思う。
それがひとの一生だもん。
困難が来ても、君と一緒に乗り越えて、喜びを分かち合って。
もう生涯離れない、永遠のパートナーだね！　えへへへ♪
……あ、お母さん？　わ、ありがとう。うん、そこに置いていいよ。
……な、なにさー！　いつも通りだよっ。うん、いつも通りっ。
う、ううう。からかわないでよもう～！　しっし！　もおお。
……あっ、もしもし？
ごめんね、……うん、お母さんがケーキと紅茶持ってきてくれて……。
ふぇ！？　お、お嬢様……？　……そ、そんな事ないよ。
いやいやいやお姫様でもないから。違うから。そんな可愛くないから。
ううう、可愛い可愛い言わない！　まったく、すぐ調子乗るんだから……。
え、んん、うん、私はどっちかと言うと……お母さん似……って言われるよ。
でもね、若い頃のお母さんの写真、すっごく可愛くて。
さらさら～な髪で、すごく整った顔でさ、でもちょっと暗い雰囲気かな。
なのにね、そんな印象が消し飛ぶくらい可愛くて可愛くて。
地味しか取り柄のない私とはえらい違いだよ……。
別人というか、もはやDNAを疑っちゃうよね……。
え、え？　いやいやいや、似てないから。ほんと。ほんとに。
そ、そうだっ。君はお父さんとお母さん、どっちに似てるの？
ふんふん……、へええ、そうなんだ。ふふ。君のご両親、お優しいひとだよね。
ほら、優しさ遺伝子、受け継がれてるし。……なんだろ、例えるなら……
お坊さん？　菩薩様？　何かしっくりこないけど……。

……ん……どうしたの？　うん、……うん。
うん、君の言う通り、当たり前に家族がいて、優しくしてくれるのも奇跡だね。
普段まったく気にしてないけど、ふっと思えば、……何て温かいんだろう。
いつでも忘れないようにしておけば、寒さなんて吹き飛んじゃうなぁ。
さて、と。いただきます……。ごめんね、食べながらお話するなんて、
ちょっとお行儀が悪いけど。でも仕方ないよ。だって君と話してるんだもん。
優先順位ってあるでしょ？　私の中では、いつも君がピラミッドの頂上にいるの。
で、その次に君がいて、その次にも君がいて、結局、全部君ね。
それ以外の事はピラミッドの外でお座りしてます。ふふっ。
……ふう。おいし。紅茶とケーキに、
あとは君がいるから、幸せの向こう側に行っちゃうよぉ。
今日も一日……素敵な時間を過ごせそうだなぁ。
君と一緒の、素敵な時間。毎日がエブリデイでオールハッピー♪
あい、らぶ、ゆー♪　うふふふっ。好きだよ、今日も昨日も明日も……大好き。
大好き～♪

5.境界線・夢

かち、こち。かち、こち。
時計の針が無機質な音を繰り返す。
月曜日の朝を刻むそれすら私には憂鬱だった。

一限目は自習だった。
インフルエンザが流行していて、担当の先生が急遽病欠となったのだ。
教室内にも空席が散見される。あの席は沢田さん。あそこは芦屋さん。そして、
あそこは……。
私の……大好きで愛しくて、温かくて、
大好きで……大好きで大好きなひとの席。
あのひともお休み。

ため息が漏れそうになるのを抑え、自習課題の範囲をチェックする。
気にしてはならない。先程から私を一点集中するその視線。
あれに意識を向けてはダメだ。
やがて一部の生徒が席を離れ、各々グループを作り談笑を始めた。
少々煩わしいが、あの獲物を見定める獣のような眼光よりはマシである。
集中、集中……とペンを握った瞬間、その目力は一層強くなり、
やがて立ち上がり。
ほかのクラスメイトが教室内を闊歩するのを待ってましたと言わんばかりに、
私へと近づいてきた。

鳥「黒崎さん」

声の主、視線の主、向かってきたのは白水鳥子（しろみずとりこ）だった。
最近この町へ越してきた転校生で、かなりの美人さん。礼儀正しく慎ましく、
勉強も運動も出来て才色兼備と呼ぶのも過言でない。完璧超人だ。
しかもあのひとの幼馴染。……仲良く出来るかどうかは、微妙だった。
白水鳥子は嘘つきだ。
それも冗談紛いのレベルでなく、質の悪い嘘をつく詐欺師だ。
あのひとの婚約者だと嘯いて私をからかい、
……いや、からかうなんてものじゃない。私の心に揺さぶりをかけた。
一体何がしたかったのか、彼女の真意なんて分からない。彼が好きなのか、
それゆえ私達の仲を引き裂きたいのか。
いずれにせよこのひとは要注意人物なのだ。

愛「……何？」

鳥「怒ってますよね」

愛「……。白水さん、私が怒るような事をしたのかな」

鳥「いえ、ふふ。黒崎さんって、いつも怒ってるから」
私ね、貴女と仲良くしたいだけなの。本当だよ？
でも貴女はそうじゃないみたいだね」

愛「……私は」

鳥「ねえ黒崎さん。あのひとの事が好きなの？」

愛「ッ、ぅ――」

鳥「私も好きだよ。……優しくて素敵なひとだよね。昔からそうだったんだ。
例えばある年の夏なんかね――」

有無を言わさずに突然語り出す白水さん。
聞きたくもない過去の惚気話が始まり、
私はいら立ちを隠そうともせず課題に手を伸ばす。
かつかつ、かつかつ。乱暴にペンを回す私の反応が面白かったのか、
白水さんは身を乗り出して雑音を掻き立てる。

愛「いい加減にして」

鳥「どうしたの？」

愛「……気分が悪いから、保健室」

鳥「私も行くよ」

愛「いいです。大丈夫です」

鳥「いいからいいから」

愛「……」

鳥「やっと二人になれたねぇ」
ね。黒崎さんって、本当にあのひとの事が好きなんだ」

愛「……貴女よりも……」

鳥「え？」

愛「あのひとは……こんな……こんな地味で友達もいない、
取り柄も何もない私を好きだと言ってくれた。
私はあのひとが好き。
貴女みたいな過去に縋りつくひとにあのひとを語られたくない。
もう私に話しかけないでください」

鳥「あのひとがこの世に存在しないひとだとしたら？」

愛「……へ？」

鳥「だとしたら」

愛「意味が分からないよ」

鳥「もしもの話」

愛「おばけって事？」

鳥「それでもいいけれど。この世界の住民ではない誰か……だとしたら？」

愛「同じ事だよ。好きなの。あのひとが誰だったとしても、あのひとでしょう。
ずっと好きだよ……。
壁があるなら乗り越えたい。いいや乗り越えてみせる。
何があったって私は……ずっと隣にいたい。ずっと、ずっと」

鳥「――そっか。黒崎さん、貴女……素敵だね。
それが聴きたかっただけ。教室、戻ろうか」

愛「なに？　本当に何がしたかったの」

鳥「うふふ」

白水さんは歩き出す。
自然と不快なものは消えていた。
教室に戻ると、クラスメイトの視線が集まった。
しかし間もなく興味の薄れた顔つきで、各自の話に花が咲き戻る。
白水さんは何も言わず、自分の席へ戻っていった。
私も席につき、やりかけの課題に手をつける。
あのひとの席は相変わらず空いていた。
……彼が、この世の住民ではなかったら。
私は笑みを零した。何とも馬鹿馬鹿しい問いかけだ。
彼が何者であろうと……好きである事、好きでいてくれる事、
それには影響もなく横槍もなく。
愛に壁はない。

かち、こち。かち、こち。

時計の針が無機質な音を繰り返す。
月曜日の朝を刻むそれは、煩わしいというよりか、
あのひとと出会うまでのカウントダウン。むしろひたすら愛おしかった。

6.あいのフリートーク

7.（朗読）月光もしくは星空/後ろ風と花/夏空Fragment/index

……ふう、今日はそろそろおやすみしよっか。
ん……？　どうしたの？　……眠くないの？
あ、ちょうどいいや。電話越しに朗読してあげよっか♪
ええと……、うん、これがいいかな。
……横になって？　楽な姿勢で、いつも寝るときみたいにね。
じゃあ、読むね。おほん……。

「月光もしくは星空」

夜にも飽き出す頃合いに。
僕の歩みは早くなる。
厚手のコート、厚手のブーツ。手招きやまぬ窓を閉め。
友を呼ぼうかひとりで行くか。そんな迷いを、コーヒーと共に飲み干した。
ここで新しい迷い。あてもない、さてさてどこへ行こうかな。
夜と昼とで、行き先は変わる。
雑木林の暗闇は怖い。大通りの喧騒は怖い。
となれば、暗闇の大通り。
僕の歩みは早くなる。
音無し道路に差し掛かる。ふと立ち止まり鑑みる。
行けども行けども場末のようだ。
さまようたぬきに、眠らぬタクシー。やたらと明るいコンビニエンス。

こんな当然の光景に、僕は胸が躍るような、それとも感傷だろうか。
言葉に出来ない心持ち。それをぶら下げ、夜の街に直線を描く。
赤ら顔のサラリーマンとすれ違い、僕みたいだ、と自嘲する。
お酒に頼る酔っぱらい。下戸の僕は、僕自身に酔っぱらう。
それが醒めるのに必要なのは、あと何年と何か月？
目的地は待ってはくれず、さながら急行列車の足は、早くも既に終着駅。
歩道橋にてため息ひとつ。夜風寒風を身に受けて立つ。
空を仰げば、ただ曇り。大通りには僕ひとり。
望んだものは月明かり――月光もしくは星空を、ただただ拝み待ちぼうけ。
部屋からここまで一時間。帰路の道のりは三時間。
友を連れてくればよかったと、一時間前の僕を睨んで。
目覚める前にさようなら。
僕はこれから眠ります。

「後ろ風と花」

雨風が頬を撫でるたび、夢の方がまだ優しくて。
蝉時雨とよく似た、君の後ろ姿は、遠く届かない。
解ってるよ。解ってたつもりでさ。君の事を。
離れた手と手は、温もりだけ残して。
足跡まみれの線路。
君の隣を歩きたい。
あすを語る背中、飽きたんだ。
さみしくて、こぼれた雨も見えないよね。
夢想、飾る想い、そう……見させて、横顔。
歩き疲れ、雨上がれば、ふと立ち止まる。
木々が揺れて、息をついた。色づく夏に。
笑ってるよ。笑ってたはずなのに。君の笑顔。
見ていたよ。その、花のようなはにかみ。

無味乾燥な足音。
君の隣を歩かせて。
あすを目指す背中、届かせて。
飽きるほど眺めた景色よ、過去になれ。
理想、変わる想い、そこに咲いた朝顔。
指先に触れ、おぼろげな足取り。
躓いた心を、ああ、抱き留めた……奇跡。

「夏空Fragment」

太陽のしるべに夏空が輝く。
何かが待ってる……行かなくちゃ。
夏の足音も、夢心地の地図を描くキャンバスに、君がいた。
「きっと、明日は晴れ」そっと呟く君。
ずっと今を、過ごしたい。
夏空に咲き散る群青の花火。流れてく景色、過去への窓に。
懐かしい香りも今はまだ、影で。誤魔化す、いたずら笑顔。
木陰のベンチに寄り添った僕らは。
何かを待ってる。あてもなく。
空っぽラムネに、誰もいない駅で、僕らが遊んだ夏がある。
さっと舞う夏風、そっと僕らを揺らす。
もっと……君と過ごせたら。
夏の陽が静まり、空に星光る。忘れてた時が今、うごき出す。
こじ開けた心は、今未来……続く。明日もあの場所へ行こう。
切なさが僕たちに涙を流し始め、君と過ごした時さえも流れ。
それでも僕らがいた。あの時、あの記憶のカケラを探し続けてる。
夏空に咲き散る思い出の花火。流れてく景色、過去への窓に。
君と僕、駆け出す。風を追い越して。
流れてく景色、明日につながる。懐かしい香りも、今はもう消えて、

輝く。記憶のカケラ。

「index」

空、曇る昼下がり。冷めてた紅茶が揺れる。
波にさらわれてしまう……怯えて手も出ずに。
きっと、いつも変わらない。繰り返し、後ずさりで。
そんな午後の足音を遮る音色は。
黒い雲を照らす空色が、耳に広がる。
勇気、元気をくれたから……一歩、踏み出そう。
栞を綴じた本から零れた、文字の隙間に光るの。
明日を探るインデックス。
ねえ、君にも……聴かせたい。愛のストーリー。
海も空も青いのは、君の眩しさだ。
雨、濡れちゃった放課後。冷めてる首を隠す。
君の温もりにばかり、頼りはしないから。
少し強がる私は、背伸びした子どもみたい。
昨日、夜更けの頃にね、髪型変えようとしてさ。
些細な仕草でも気づいてくれるよね。
心の奥までも見せたい気持ちは……。
愛のコール鳴らすから、ちゃんと聴いてて？
「大好き♪」
さあ、栞を綴じた本から零れた、文字の隙間に光るの。
明日を探るインデックス。
ねえ、君にも聴かせたい。愛のストーリー。
海も空も青いから、君を思い出す。
ずっと大好き。いつもありがとう。
愛の歌、今すぐ君に伝えたいよ。

いつも、ありがとう♪
明日も一緒に頑張ろうね。
おやすみなさい……。

（終）